

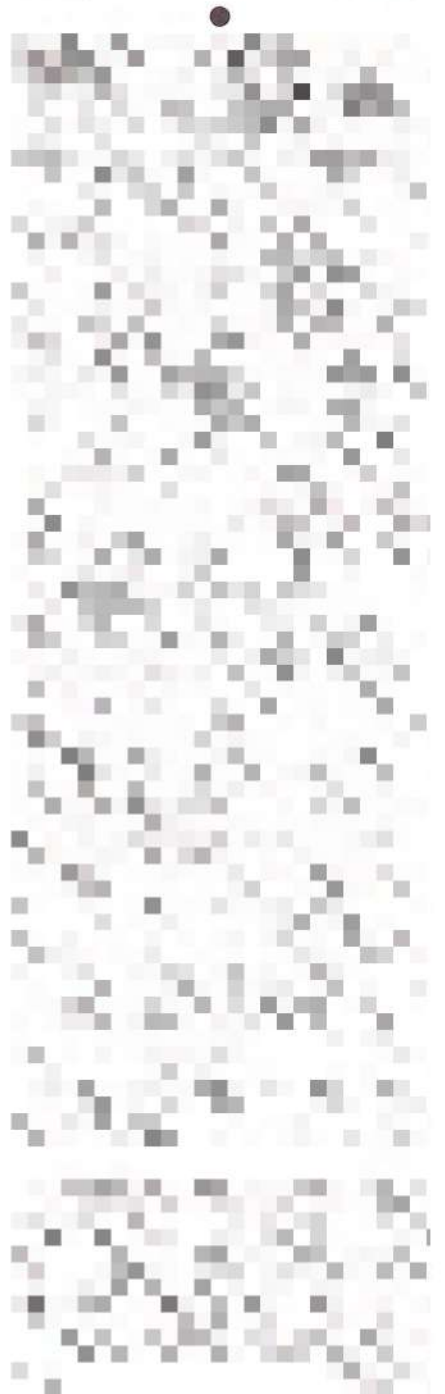
Scramble Shot



名作誕生の瞬間か。左からプロハスカ、エルトマン、ヤンソンス © Astrid Ackermann

ラノを歌う。続く合唱も、一句ずつ途切れたような音を上手に響かせ美しいハーモニーを聴かせた。第2部のバリトン・ソロではミケランジェロのソネット(詩、リルケ訳)を、ハンノ・ミュラー=ブラッハマンが管楽器のような唇使いで操った明瞭なドイツ語と最適な音色を駆使し、福音史家のような存在感を見せた。各弦楽器の第1奏者らが美しい音色で紡いだ音をドラマティックに膨らませた放送響も実力を誇示した。

病気のために作曲家のリームが臨席できなかったのが残念な、大作誕生の瞬間だった。(中 東生)



ーズで、1948年からはバイエルン放送交響楽団が引き継いでいる。彼らがリームに委嘱した「レクイエム」が3月30日、ヘラクレスザールで世界初演された。

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団がリームに委嘱し、今年2月に世界初演された、ブーレースに捧げる《挨拶の時2》がまず演奏され、あの世との距離を縮めた後、張りつめた緊張感の中、イザヤ書のテキストをハイ・ソプラノがデュエットする「レクイエム」第1部が始まった。自身も作曲家の娘として生まれ、リームお気に入りのソプラノとして多くの曲を献呈されたモイツァ・エルトマンですら、出を間違えそうになるが、マリス・ヤンソンスの落ち着いた棒で事なきを得た。

そのかわら、細川俊夫《嘆き》世界初演でも起用されたアンナ・プロハスカは極限を楽しむように、もう一人のソブ

Opera

ヴォルフガング・リームの《レクイエム〜詩》が世界初演

「musica VIVA」はミュンヘンが誇る作曲家カール・アマデウス・ハルトマンが1945年に始めた現代曲コンサートシリ